

アダムスミスの生産的労働論(抄)

諸国民の富(二)第二編第三章 (岩波文庫(二))

資本の蓄積について、すなわち生産的および不生産的労働について

[労働に生産的労働および不生産的労働という二つの部類のものがある]

労働にはそれが加えられる対象の価値を増大させる部類のものと、このような結果を全然生まない別の部類のものがある。前者は価値を生産するのであるから、これを生産的労働と呼び、後者はこれを不生産的労働と呼んで差し支えない。

製造工の労働は、一般に自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを付加する。これに反して、召使いの労働は、どのような価値も付加しない。

製造工は、自分の賃金を自分の親方から前貸してもらってはいるけれども、こういう賃金の価値は、一般に自分が労働を加えた対象の増大した価値のうち利潤をとまって回収されるのであるから、実は主人にはなんの費用もかからない。ところが、召使いの生活維持費はけって回収されないのである。人は多数の製造工を使用することによって富み、多数の召使いを扶養することによってますますなる。とはいえ、後者の労働もその価値をもっているるのであって、前者のそれと同じように当然その報酬を受けるべきものである。

しかしながら製造工の労働は、ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりするのであって、こういう商品はこの労働がすんでしまった後でも、少なくともしばらくは存続する。それは、他のばあい必要に応じて使用されるために、貯蔵され、貯えられる一定量の労働である。この対象の価格は、あとになってから、はじめにそれを生産したのと等量の労働を活動させることができる。

これに反して、召使いの労働は、ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりはしない。かれの労働は、一般的にはそれが行われるまさにその瞬間に消滅してしまうのである。

[召使いの労働以外にも、多くの種類の不生産的労働がある]

たとえば、主権者ならびにその下に奉仕する司法および軍事のいっさいの官吏、全陸海軍人も不生産的労働である。かれらは公共社会の使用人なのであって、他の人々の勤労の年々の生産物の一部分によって扶養されている。かれらの労働は、どれほど名誉あるものでも、どれほど有用で、必要なものであろうとも、あとになってからそれと引きかえに等量の労働を獲得しうるなものをも生産しない。これらのすべてての人々の仕事は、

それが生産されるまさにその瞬間に消滅してしまうのである。

以下、箇条書き的に要点筆記

[生産的な人手を扶養するために使用される生産物の割合は、翌年の生産を決定する]

- ・生産的、不生産的、さらに全然労働しない人々は、その国の土地と労働の年々の生産物によって等しく扶養されている。
- ・この生産物は無限ではありえず、一定の限界をもつ。ある年に不生産的な人手を扶養するのに使用される生産物の割合が小か大かに応じて、前者の場合多くの生産物が、後者の場合すくない生産物が生産的な人手のために残される。またその翌年の生産物もそれに応じて大とも小ともなる。
- ・年々の全生産物は(大地の自然発生的な生産を除き)生産的労働の成果である。

[生産物の一部分は資本を回収し、一部分は利潤および地代を構成する]

・土地および労働の年々の生産物は、最初に土地かまたは生産的労働者の手、いずれかから出てくる場合には二つの部分に分割する。

第一に資本を回収するために、すでに資本の中から引き上げられた食料品・材料および完成品を更新するために。他の部分はねこの資本の所有者の資財の利潤としての収入か、他の人の土地の地代としての収入かのいずれかわ構成する。

・土地の生産物は、その一部分は農業者の資本を回収し、他の部分はかれの利潤と地主の地代とを支払う。一大製造場の生産物は、これと同じように、その最大の部分は、その事業の企業家の資本を回収し、他の部分はかれの利潤を支払い、その資本の所有者の収入を構成している。

[資本を回収する部分は、生産的な・・・]

- ・資本を回収する部分は、生産的な人手以外のもので扶養するために使用されることが決していない。それは生産的労働の賃金だけを支払う。
- ・利潤または地代として収入を構成する部分は、生産的であろうと、不生産的であろうと無差別に扶養する。

★ミスの収入の規定 第二編第二章 p251

[総収入とは年々の全生産物であり、純収入とは固定資本と流動資本との維持費を差し引いたあと、自由処分にかかされたものである]

自分たちの資本を蚕食することなしに、直接の消費のために留保される自分たちの資財に繰り入れることができるもの、すなわち自分たちの生活資料・便益品および娯楽品のために使うことができるもの。かれらの実質的富もまた、かれの総収入ではなしに、かれらの純収入に依存する

[不生産的な人手や労働しない人々は、収入によって維持される。]

・不生産的労働者や全然労働しない人々は、そのすべてが収入によって扶養される。かれらは第一に、年々の生産物のうち、土地の地代としてであれ資財の利潤としてであれ、特定の人々の収入を構成するはじめから予定されている部分によつて扶養されるか、第二に、年々の生産物のうちで、はじめは資本を回収したり生産的労働者を扶養いするためだけに予定されていたものの、かれらの必要な生活資料をこえてあまりあるかぎり、生産的・不生産的にはかかわりなく扶養される。

大地主や富商ばかりではなく普通の職人でさえ、
・一群の不生産的労働者の扶養に対する自分の分担の一助にしようであろうし、なにがしかの租税を支払って不生産的な人々を扶養するのに助力しよう。

しかし年々の生産物のうち資本を回収するためにはじめから予定されている部分は、その生産的労働の全量を余すことなく活動させるまでは、不生産的な人々の扶養にふりむけられはしない。

土地の地代と資財の利潤とは、不生産的な人々で手その生活資料をひきだす主要な源泉である。

これらの収入は、生産的な人手と不生産的なそれとの双方を無差別に扶養しよう。

[生産的な人々の割合は、利潤および地代と、資本を回収する生産物部分との割合に依存する。]

生産的な人手と不生産的なそれとの割合は、年々の生産物のうち、資本を回収するために予定される部分と、地代または利潤の収入を構成する部分との割合に依存することが大きい。この割合は富国では貧国のそれとは甚だしく異なる。

[資本を回収するために必要とされる生産物の割合は、現在のほうが昔よりも大きい。]

生産的労働を維持するために予定された基金は、富国のほうが貧国よりはるかに大きいばかりでなく、それは生産的な人手と不生産的なそれとの双方を扶養するために使用される。一般に不生産的な人手を偏愛する基金に対しても、大きな割合をたもつ。

[基金のあいだの割合は、その国の住民が勤勉になるか怠惰になるかということを決定する。]

われわれは、われわれの父祖よりも一層勤勉である。現代においては、二、三世紀前よりも勤勉を維持するために予定された基金が、怠惰を維持するために使用されがちな基金に比例してはるかに大きいかせである。われわれの先祖は、勤労に対する刺激が不足していたために怠惰であった。

[ある国の資本の増減は、その結果としてこの国の年々の生産物を増減させる]

資本と収入の間の割合は、どのような所でも、勤勉と怠惰の間の割合を決定している。資本が優位を占めているところでは、勤勉が優勢を示し、収

入が優位を占めているところでは、怠惰が優勢を示している。

それゆえ、資本が増減するごとに、勤勉の実際量、つまり生産的な人手の数も自然に増減する。

結果としてその国の土地および労働の年々の生産物の交換価値、つまりその国のすべての住民の実質的富および収入も自然に増減する傾向をもっている。

[資本は節儉または貯蓄によって増加される]

[一国民の生産物の増加には資本の増加が必要である。もし生産物が増加するならば、資本もまた増加したと確信できる。このことは平和な時代には全ての国民についての事実である。]

ある国民の土地および労働の年々の生産物は、その生産的労働者の数を増加するか、または以前から使用されている労働者の生産諸力を増加するかいずれか意外には、その価値を増加することが決してできない。

第五章 資本のさまざまな用途について

[資本を使用するには四つの異なる方々がある]

第一に、社会の使用および消費のために年々に必要とされる粗成産物を製造したり調製したりするため。－土地・鉱山・漁場の改良または耕作を企てるすべての資本。

第二に、直接の使用および消費のためにこの粗を製造したり調製したりするため。－すべての親方製造業者。

第三に、粗製産物かまたは製造品かのいずれかを、それらの物が潤沢な地方から欠乏している地方へ運送するため。－すべての卸売り商人。

最後に、この両者の特定部分をそれを必要とする人々の随時的な需要に適するような小口に分割するため。－すべての小売り業者。

[このような資本の使用者は生産的労働者である。]

以上の四つの方法のどれかに自分の資本が使用されている人々は、かれら自身生産的労働者である。かれらの労働は、それが加えられる対象、つまり商品にそれ自体を固定し、実現し、彼ら自身の生活資料および消費物の価値を付加する。

以上

マルクスの生産的および非生産的労働

資本論断片（岩波文庫）－第6章直接的生産過程の結果1－生産的及び非生産的労働（抄）－

□資本主義的生産の直接の目的及び本来の生産物は一剰余価値であるから、直接に剰余価値を生産する労働のみが生産的であり、直接に剰余価値を生産する労働能力の執行者のみが生産的労働者である。従ってまた、生産過程で直接に資本の価値増殖のために消費される労働のみが生産的である。

・労働過程一般の単純な見地からすれば、我々には生産物に、否むしろ商品に実現される労働が生産的であるように見える。資本主義的生産過程の見地からすれば、より細かい規定が加わる。

すなわち、直接に資本を増殖せしめ、或いは剰余価値を生産し、従って労働者、その執行者に対する等価物なしに、剰余価値のなかに実現され、剰余生産物の中に、従って労働手段の領有者、すなわち資本家のための商品の剰余的な加量の中に実現される労働のみが生産的である。

可変資本、それ故にまた総資本を、 $C + \Delta c = C + \Delta v$ となすところの労働のみが生産的である。すなわち、それは直接に自己増殖の作因として、剰余価値生産の手段として資本に役立つ労働である。

・資本主義的労働過程は労働過程の一般的規定を止揚しない。それは生産物及び商品を生産する。この限りにおいて、使用価値と交換価値の統一としての商品の中に対象化される労働は依然として生産的である。だが、労働過程は単に資本の価値増殖過程のための手段にすぎない。

従って、商品に自らを表示する労働、だが、個々の商品を考察する場合には、その商品の可除部分に不払い労働を表示する労働、全生産物を考察する場合には、総商品量の可除部分に不払労働のみを表示し、従って資本家にとって何物をも要しなかった生産物を表示する労働、が生産的である。

生産的労働をなす労働者は生産的である。直接に剰余価値を創造する、即ち資本を価値増殖せしめる労働は生産的である。

□その労働過程が、資本または資本家による労働能力の－この労働の持ち主の－生産的消費過程に等しいような労働者のみが生産的である。このことから直ちに次の二つのことが起こる。

・第一に、資本の下への労働の実質的包摂または特殊的に資本主義的な生産様式の発展と共に、個々の労働者ではなくて、社会的に結合された労働能力が次第に総労働過程の現実的機能車となり、そして相競争し、生産的機会全部を形成する各種の労働能力が、非常にいろいろな方法で商品形成の或いはここではより正確には、生産物形成の直接的過程に参加するから、従って、ある者はより多く手をもって、他の者はより多く頭脳をもって労働し、ある者は監督、技師、工学者等々として、

他の者は監視者として、第三の者は直接的肉体労働者或いは単なる助手として労働するのであるから、次第に、労働能力の機能は生産的労働の直接的概念の下に編入され、この機能の担い手は生産的労働者、すなわち直接に資本によって搾取され、その価値増殖過程及び生産過程一般に従属する労働者の概念の下に編入される。

仕事場を組成している総労働者を考察すれば、その結合された活動は物質的には直接に総生産物、それは同時に商品の送料であるが、に実現される。この際、この総労働者の一員でしかない個々の労働者の機能が直接的肉体労働からより遠いかより近いかなどは全くどうでもよいことである。

・第二に、生産的労働のより細かい規定は、資本主義的生産過程の与えられた独特の徴表から自然に推論される。まず第一に、労働能力の所有者はその売手として、我々が明瞭に見たように、不合理にも商品の売手ではなく活きた労働の直接の売手として、資本或いは資本家に対立する。彼は賃金労働者である。これが第一の前提である。

だが第二に、流通に属するこの予備的な過程に導かれて、彼の労働能力及び彼の労働は、活きた因子として資本の生産過程に直接に合体される。

そして、それ自身その構成部分の一つとなる。しかもそれは一部分前貸しされた資本価値を受け取る。すなわち再生産するのみならず、同時にそれを増大せしめ、それ故にまた剰余価値の創造によって初めて自ら増殖する価値に、資本に転化する可変的な構成部分である。この労働は生産過程の間に、直接に流動する価値量の大きさとして対象化される。

・一方では、第二の条件が起こることなくして第一の条件が起こることがあり得る。一人の労働者が賃銀労働者、日雇い等々でありうる。このことは、第二の要素が欠けている場合には常に起こる。

あらゆる生産的労働者は賃銀労働者である。だがそれかといってあらゆる賃銀労働者が生産的労働者であるわけではない。労働が、生きた因子として可変資本の価値を置きかえるためにではなく、また資本主義的生産に合体されるためにではなく、使用価値として消費されるために、サービスとして買われることがしばしば起こるが、このような労働は生産的労働ではなく、このような賃銀労働者は生産的労働者ではない。

・このような時には彼の労働は交換価値を生むものとしてではなく、その使用価値の故に消費されるのである。それは非生産的に、生産的でなく消費される。

従って資本家はこの労働に対して、資本家として、資本の代表者として対立しはしない。

資本家は自己の貨幣を収入としてこの労働と交換するのであつて、資本としてではない。この労働の消費は、 $G - W - G'$ を構成しないで、 $W - G - W$ （この最後のものが労働またはサービス自身である）を構成する。この貨幣はここでは単に流通手段として機能するのであつて、資本としてで

はない。

・資本家が自分の私的消費のために買入れる商品は生産的に消費されず、資本の因子にならないのと同様に、彼が自由意思でまたは強制されて（国家等々において）その使用価値の故に、自己の消費のために買うサービスもそうはならない。それは資本の因子とはならない。従ってそれは生産的労働ではなく、その担い手は生産的労働者ではない。

□資本主義的生産の発展と共に、あらゆるサービスが賃金労働に転化し、そのあらゆる執行者が賃銀労働者に転化する。すなわち彼らが生産的労働者としての性質を共にするようになるという現象は、両者の混淆にますます多くの機因を与える。

なぜならそれは資本主義的生産を性格づけ、また資本主義的生産自身によってつくられる現象であるからである。他方それは、弁護士どもに、生産的労働者を—なぜならそれは賃銀労働者であるから—単に自己のサービス（すなわち使用価値としての労働）を貨幣と交換するところの労働者に転化せしめる機因を与える。・・・兵士は賃銀労働者、すなわち傭兵である。だが彼はそれかといって、決して生産的労働者ではない。

・この他の誤謬は次の二つの源泉に由来する。

第一に、資本主義的生産内でも、商品生産的労働の諸部分は常に、より以前の生産様式に属する様式で、すなわち資本及び賃金労働の関係が事実上まだ存在せず、従って資本主義的立場に相応する生産的及び非生産的労働の範疇が全然適用されない時代の様式で遂行される。

・だが、また実際にはなおこの生産様式によって包摂されない関係も、支配的生産様式に相応して、その様式の下に観念的に包摂される。例えば、自営の労働者は彼自身の賃銀労働者である。彼自身の生産手段は資本として観念の上で彼に対立する。

彼自身の資本家として彼は、自分自身を賃銀労働者として使用する。こうしてこれに類する変則は、生産的及び非生産的労働に関する愚にもつかない議論に好都合な分野を提供する。

・第二に、ある非生産的労働は偶然的に生産過程と結びつくことがある。そしてその価格が商品の価格にことさえある。すなわちこの労働のために投下された貨幣が前貸しされた資本の一部をなすことさえある。従って、その労働は、収入とではなく、直接に資本と交換される労働として現れる。

□生産的労働は、労働能力及び労働が資本主義的生産過程において演ずる全関係、様式の略語にすぎない。それ故に、我々が生産的労働について論ずる場合には、社会的に規定された労働、労働の買手と売手との特定の全関係を含む労働についていっているのである。

・生産的労働は資本としての貨幣と、すなわちそれ自身資本であり、資本として機能する規定をも

ち、労働能力に資本として対立するところの貨幣と直接に交換される。従って生産的労働とは次のようなものである。

すなわち労働者のためには彼の労働能力のあらかじめ規定された価値を再生産するにすぎず、これに反して価値想像的活動として資本を増殖させ、この活動によってつくられた価値を資本とし、労働者自身に対立させるものである。対象化された労働と生きた労働との関係、それは前者を資本にし、後者を生産的労働にする。

・資本主義的生産過程の特殊的生产物、剰余価値は生産的労働との交換によってのみ創造される。資本にとって労働の特殊の使用価値をなすものは、この労働の特定の有用な性質ではなく、同様にこの労働がその中に対象化される生産物の特殊な有用な属性でもなく、交換価値（剰余価値）の創造的要素としてのその性質である。

・資本主義的生産過程は単なる商品の生産ではない。それは不払労働を吸収し、生産手段を不払労働吸収の手段にする過程である。これまで述べられたことから推論されることであるが、生産的労働であるということは、それ自身労働の特定の内容、その特別な有用性やそれが表される独特の使用価値とは全然関係をもっていないところの労働の規定である。それ故に、同一内容の労働が生産的にも非生産的にもなり得る。

・例えば「失樂園」を著したミルトンは非生産的労働者であった。これに反して、彼の出版商に工場労働を供給する著述家は生産的労働者である。蚕が絹を生むように。ミルトンは「失樂園」を自己の本性の発動として生産した。その後彼はこの生産物を五ポンドで売った。すなわち彼はこの限りにおいて商品販売者となった。だが出版社の命令で書物を、例えば経済学綱要を生産するライプツィヒの文筆プロレタリアは、生産的労働者に近い。彼の生産が資本の下に包摂され、資本価値増殖のためにのみ行われる限りにおいて。

・鳥のように歌う女歌手は非生産的労働者である。彼女が自分の歌を金で売るならば、その限りにおいて彼女は賃銀労働者或は商品売手である。だがこの同じ女歌手が起業家に雇われて、金を得るために歌わせられれば、生産的労働者である。なぜなら彼女は直接に資本を生産するからである。

・同一の労働（例えば園芸、仕立て等々）が同一の労働者によって、一人の産業資本家のために、或は一人の直接的消費者のために遂行されたりすることがあり得る。この二つの場合において、彼は賃銀労働者または日雇いである。だが、第一の場合には彼は生産的労働者であり、第二の場合では非生産的労働者である。なぜなら彼は第一の場合では資本を生産し、他の場合では生産しない。第一の場合では彼の労働は資本の自己増殖過程の要素を形成するが、他の場合ではそうではないから。

□生産的労働と非生産的労働をその素材的内容によって規定しようとする試みは、次の三つの源泉に由来する。

一、商品とは如何なるものか、生産的労働とは如何なるものか等々という経済的形態規定を、この形態規定または範疇の素材的担い手それ自身のもつ属性と見なす、資本主義的生産様式に特有な、その本質から生ずる物神崇拜的見解。

二、労働過程そのものをみれば、ある生産物(ここでは物質的富のみが問題であるから、物質的生産物)に結実する労働のみが生産的であるという見解。

三、現実的再生産過程においては—その実質的要素を考察すれば、再生産的物材に表現される労働と単なる奢侈品に表現される労働との間には、富の形成等に関して大きな差異があるという見解。

(例、この二つの場合において、私は私が支出した貨幣を、私の個人的消費に帰すべき、私の個人的欲望を満足させるべき使用価値に転化させるのであって、資本にではない。仕立職人は、仕立職人のところで私のために労働しようと、或は私の家で労働しようと、私に対しては同じサービスである。

これに反して同じ仕立職人が、ある仕立商人に雇用されて、この資本家のためにするサービスは、彼が12時間労働してただの6時間等々だけ支払われるという点にある。従って、彼が資本家にするサービスは、彼が6時間だけ無償で労働するという点にその本質をもっている。・・・それ故に仕立商人は、できさえすれば、このズボンを再び貨幣に、すなわち仕立労働の特定の性質が完全に消滅した形態に転化せしめようとする。そして行われたサービスは、一ターレルから二ターレルになったということの中に表現される。

・サービスは一般に、物材としてではなく活動として有用である限りの労働の特別の使用価値の表現でしかない。・・・資本主義的生産においては汝がなすために興うは、対照的富と生きた労働との間の極めて特殊な関係を表す。従って、このサービスの買入れには労働と資本の特殊な関係は何ら含まれていない。全然消え去ったか、全然存在しないかであるのだから、それはもちろん、資本と労働との関係を表現するために、セイ、バスティアその他一党が愛好する形態である。)

・労働者もまた貨幣でサービスを買う。これは支出の一種ではあるが、貨幣を資本に転化せしめる方法ではない。何人といえども医者或は法律家の「サービス」を買って、投下された貨幣を資本に転化せしめる手段とするものはない。サービスの大部分は、料理女等々のように、商品の消費費用に属する。

・生産的労働と非生産的労働との相違は、単に、労働が貨幣としての貨幣と交換されるか、資本としての貨幣と交換されるかということにある。

□非生産的生産においては、それが純粹に交換のためになされ、商品が生産される場合でさえ、二つのことが可能である。

一、この生産は、生産者から分離して存在し、従って生産と消費の中間において商品として流通し得る商品、例えば書物、絵画、遂行しつつある芸術家の芸術行為と異なるあらゆる芸術生産物のような商品となる。ここでは資本主義的生産は非常に制限された程度で適用され得る。

これらの人々は彫刻家等々として職人等々をもたない限り、主として(独立でなければ)商人資本のために、例えば出版業者のために労働する。なわち単に形式的に資本主義的生産様式への過渡的形態自身を形成するにすぎない関係である。このような過渡的形態にあるということは、実に最大の労働搾取が行われようとも、この事情を少しも変えるものではない。

二、この生産物は生産するという行為から分離され得ない。ここにおいても資本主義的生産様式は威厳されてのみ行われ、事柄の性質に従ってほんの二三の部面で行われるにすぎない。(私は医者を用いるのであって、医者の小使いを用いのではない。)

例えば、学校において教師は学問工場の企業かにとっては、単なる賃金労働者でありうる。こういう人々は資本主義的生産の全体にとっては顧みるに足りない。)

□『生産的労働者、それは直接に彼らの主人の富を増大させるものである』(マルサス『経済学原理』第二版ロンドン、1836年)

生産的労働と非生産的労働との区別は、蓄積に関して重要である。なぜなら、生産的労働との交換のみが剰余価値の資本への再転化条件の一つだからである。

その価値増殖過程にある資本—すなわち生産的資本—の代表者としての資本家は、生産的機能を果たす。それはまさに生産的労働を監督し搾取することにある。・・・彼の階級は何よりもまず生産的階級である。(労働過程の指導者としての資本家は、彼の労働が、生産物に物体化される総労働過程に含まれるという意味では、生産的労働をなす。)

・我々はここではまだ、直接的生産過程内における資本を知っているだけである。資本の他の機能—及びこれらの機能内においてのみ働く行為者—と如何なる関係にあるかは後になって初めて展開され得る。

・生産的労働の(従ってまたその反対物としての非生産的労働の)規定は、従って、資本の生産が剰余価値の生産であり、このような生産によって充用される労働が剰余価値を生産する労働であるということに基づいている。

以上